



Title	アイヌ語動詞にあらわれるtaと充当接頭辞について
Author(s)	小林, 美紀; KOBAYASHI, Miki
Citation	北方言語研究, 14, 219-231
Issue Date	2024-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/110536
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92084
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_Kobayashi.pdf



アイヌ語動詞にあらわれる ta と充当接頭辞について

小林 美紀
(国立アイヌ民族博物館)

キーワード：アイヌ語、形態論、充当接頭辞、場所格助詞、昇格

1. はじめに

アイヌ語動詞は基本形に接頭要素や接尾要素が接合することによって構成されている。これらの接合要素は結合価との関連からみれば、動詞の結合価を1つ増やすもの、動詞の結合価を1つ減らすもの、動詞の結合価を増減させないものの3種類に分けられる。本稿では動詞の結合価を1つ増やす接頭要素に着目する。動詞の結合価を1つ増やす接頭要素としては、従来「充当接頭辞」などと呼ばれてきた接頭辞がよく知られている。その他に、同様の働きをするものとして、場所格助詞との関連性が推測される ta が確認されることを小林(2016)では指摘した。本稿では充当接頭辞と ta を比較し、動詞の結合価を1つ増やすという機能は共通しているものの、接合の順序や、抱合される名詞の種類に違いがみられること、どちらにも主語を取り込む構造があり、その際昇格という現象が起きていることを述べる。

2. ta について

アイヌ語動詞中にあらわれる ta について小林(2016)では取り上げた。その概要を本節では述べる。

ta は動詞の結合価を1つ増やす機能があり、ta が接合する際には、ともに名詞が動詞に抱合される。構造的には「付加詞を取り込む構造」と「主語を取り込む構造」の2種類がある。付加詞を取り込む構造は(1)のような例がある¹。こうした「位置名詞-ta」という要素が動詞中に取り込まれる例は非常に限られており、(2)のような分析的な形としてあらわれる方がより一般的である²。

- (1) ne hi anak a=maktaanu
その こと は 4.A=～を奥に置く
「そのことはどうでもいい。」

[田村 1984:14]

- (2) ne suwop apunno, a=ranke sirka ta a=anu ranke
その 箱 静かに 4.A=～を下ろす 地面 ～に 4.A=～を置く 反復
a=anu ranke ayne
4.A=～を置く 反復 あげく

¹ 用例の表記、グロス、訳は全て引用者による。引用文献を参考にした。

² 田村(1988: 35) は位置名詞を「上下、左右、前後など、空間的、時間的な位置を表す名詞で、多くは名詞句の後におかれて、その物や人に対する相対的位置関係を表わす」としている。

「私はその箱を静かに下ろして、地面にどンドン置いたあげく」

[田村 1989:78]

(1)(2)の形式を並行して考えると、このように位置名詞が直前にあらわれるケースにおいては語中にあらわれる **ta** は格助詞の **ta** との関連性が強く推測される。ただし、前述のように、このような例は数としては非常に限られている。また、他の格助詞について筆者は現時点で十分な観察ができていないため断定は難しいが、同様の事例は今のところ見当たらない。そのため、このように動詞中に格助詞との関連が推測される要素があらわれるのは、例外的であるといえる。また、主語を取り込む形式のものは、次のような語が確認される。

(3) **ku=poppetaasin**

1SG.S=汗をかく

「私は汗をかいた。」

[田村 1996:544]

ta という要素を含む動詞の語構成を結合価の観点から考えるにあたり、小林(2016)では動詞の結合価を 1 項動詞は+1、2 項動詞は+2 また、動詞に接合する要素にも動詞の結合価を 1 つ増やすものには+1、動詞の結合価を 1 つ減らすものには-1、動詞の結合価を増減させないものには 0 という表示を用いた。

(1)**maktaanu** の場合、「**mak** 奥(-1)-**ta(+1)**-**anu**~を置く(+2)」のような構造になっていると考えられる。基本形 **anu** 「~を置く」は 2 項動詞であり、**maktaanu** という動詞全体でも 2 項動詞であることから、**mak-ta** は動詞の結合価を増減させない 0 の要素であることがわかる。そして、**mak** 「奥」は名詞要素-1 であるため、**ta** は+1 の要素であることが判明する。

(3) **poppetaasin** 「汗をかく」は、「**poppe** 汗(-1)-**ta(+1)**-**asin** 出る(+1)」のような構造になっていると考えられる。基本形 **asin** 「出る」は 1 項動詞であり、**poppetaasin** という動詞全体で 1 項動詞であることから、**poppe-ta** は動詞の結合価を増減させない 0 の要素であることがわかる。そして、**poppe** 「汗」には 2 通りの可能性がある。概念形「汗」であれば-1 であるが、所属形「~の汗」であれば、「~の」に当たる所属先が必要となり、0 の要素である。**poppe** という語自体からはこれを判別できないが、**osumtacik** 「~の末端から油脂が垂れる」や **okemtanyne** 「~の末端から血が流れる」といった語が確認される(表 1.参照)³。**poppe** と同じ位置に **sum** 「油脂」や **kem** 「血」といった明らかに概念形の名詞が出現することから **poppe** も同様に概念形であり、-1 の要素であるとみなせる⁴。このことから、この構造においても **ta** は+1 の要素であることが判明する。ただし、この構造においては、場所格助詞との関連性について現段階では十分に分析できておらず、更なる考察が必要である。

³ 表は小林(2016)より再掲。表中の解釈は筆者がつけたものである。出典を参考にしたが、出典に示されている解釈と異なるものもある。

⁴ **poppe** は概念形と所属形が同じ形であるが、**sum** と **kem** は概念形と所属形が異なっており、**sum** や **kem** は概念形である。所属形は **sumi(hi)**, **kemi(hi)** という形である。

表 1. 主語を取り込む構造にあらわれる ta の例

例		出典
poppe-ta-asin (poppetasin) 汗 出る	～が汗をかく	中川 1995:359, 田村 1996:544, 萱野 2002:412, 服部 1964:19
o-sum-ta-cik ～の末端 油脂 滴る	～の末端から油脂が垂れる	中川 1995:118
o-sum-ta-pes ～の末端 油脂 滴る	～の末端から油脂が滴る	中川 1995:118
o-kem-ta-nayne ～の末端 血 流れる	～の末端から血が流れる	田村 1996:462, 萱野 2002:169
e-kem-ta-nayne ～の上端 血 流れる	～の上端から血が流れる	田村 1996:86
pa-ta-parse 湯気 飛び散る	～から湯気があがる	田村 1996:515
e-non-ta-carse ～の上端 つば 飛び散る	～の上端からつばが飛び散る	田村 1996:101
e-non-ta-pus ～の上端 つば 飛ぶ	～の上端からつばが飛ぶ	中川 1995:94, 田村 1996:101, 萱野 2002:149
nupoppe-ta-rikan 汗 湿る	～が汗をかく	知里 1975:20
e-rat-ta-cik ～の上端 粘液 したたる	～の上端からよだれが滴る	知里 1975:265

3. 充当接頭辞について

従来「充当相」あるいは「充当接頭辞」、「目的語指示接頭辞」「格関係指表示接頭辞」などと様々に呼ばれてきた接頭辞 e-, o-, ko-がある(本稿では「充当接頭辞」と呼ぶことにする)。

この接頭辞について先行研究の金田一(1931: 134-146)は、「充当相(applicative)の接辞」と呼び、その機能について、結合価に関する点については、「さて此の e-は動詞の語頭へ添ふと、第二類のものでも第一類に変じて来る」と述べている。金田一(1931)の第二類は、いわゆる自動詞(本稿では 1 項動詞)を指し、第一類はいわゆる他動詞(本稿では 2 項動詞)を指す。つまり、e-, o-, ko-が接頭すると 1 項動詞が 2 項動詞になり、動詞の結合価が 1 つ増えることを指摘している。

充当接頭辞の意味について、簡潔に説明しているものとして中川(1995)を紹介する(下線は引用者による)。

エ e^s- 【接頭辞】 ～について。～で以て。～〈場所〉で；～で以ての意味では格助詞アニ ani と、～での意味ではタ ta、ペカ peka と交換することができる。動詞のとり名詞の数をひとつ増やす。例：エトランネ etoranne 「～をめんどうくさがる」<e-「～について」toranne 「なまける」。エシク e-sik 「～で一杯になる」<sik。 「一杯になる」。エロク e-rok 「～〈場所〉に住まう」<rok 「座る」。

[中川 1995 : 67]

コ ko³- 【接頭辞】 ①～に向かって。～に対して。 ②～と共に。

[中川 1995 : 176]

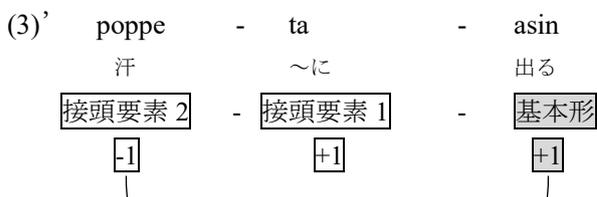
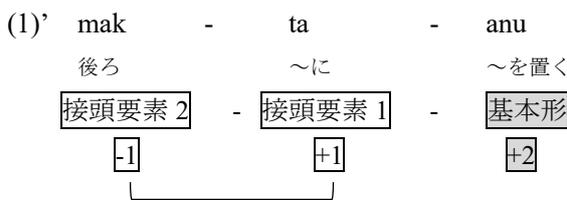
オ o⁴- 【接頭辞】 ～〈場所〉へ。～〈場所〉に。～〈場所〉から；エ e⁵- やコ ko³- と同じく、動詞のとり名詞の数をひとつ増やす機能を持つ接頭辞だが、エ、コほど生産性が高くなく、限られた単語にしかつかない。格助詞ウン un と交換できる。ヘメスアンヒネ オシマケヘ アオアラパ ワ インカラナクス hemesu=an hine osmakehe a=o-arpa wa inkar=an akusu 山をのぼってその後ろ側へ行ってみると

[中川 1995 : 109]

4. 接合順序について

4.1. ta の場合

ta の場合、2. でみたように構造的には付加詞を取り込む構造 ((1)参照) と主語を取り込む構造 ((3)参照) の2種類がある。以下に(1)と(3)を例にそれぞれの構造における結合価および項の関係を図示する。



ta があらわれる構造は、動詞の前に ta が置かれ、その前に名詞が置かれる構造である。動詞の語頭に ta がくる形、つまり、*ta-anu や*ta-asin のような形は確認できず、その前には必ず名詞がくる。付加詞を取り込む構造の場合は、ta を埋める名詞が ta の直前にあられ、主語を取り込む構造の場合は、動詞基本形の項である主語の名詞が ta の直前にあられる⁵。

4.2. 充当接頭辞の場合

充当接頭辞の場合、福田(1956 : 55)は、e- と ko- について「これが接合すると、動詞のとり得る客語の数が一つふえる。この二つは、意味上差支えない限り、殆ど自由に人称語幹に接

⁵ (3) のような動詞中にあられる ta については、場所格助詞との関連性について現段階では十分に分析できておらず、更なる考察が必要ではあるが、後で述べるように、動詞全体の項となる名詞は場所として考えることができるため、ここではひとまず(3)' の ta 「～に」という解釈を当てておく。

合して新しい人称語幹を作ることができる」としている⁶。また、同時に e- と ko- が一語にともに接合する可能性も示している。充当接頭辞について、福田(1956)の「意味上差支えない限り、殆ど自由に人称語幹に接合」という指摘は重要である。どのようなパターンが観察されるかについて、本節では ta との差異を意識しながら、1 項動詞および 2 項動詞への接頭について、4.1. 同様に具体例とともに結合価および項の関係を図示し、多くのパターンがあることを示す。以下の(4)～(7)は接頭要素が付く前の形が 1 項動詞、(8)～(12)は 2 項動詞の例である。

- (4) a=kor aca kor kotan a=oarpa ruwe ne.
 4.A=～が持つ おじ ～が持つ 村 4.A=～に行く こと COP
 「私のおじの村に私は行ったのだ。」

[久保寺 1977 : 451]

- (4)' o - arpa
 ～に 行く
 接頭要素 1 - 基本形
 +1 +1

- (5) suy uymam'earpa=an yakka
 また 交易に行く=4.S しても
 「また私が交易に行っても」

[国立アイヌ民族博物館 : 34637ABPL00325]

- (5)' uymam - e - arpa
 交易 ～に 行く
 接頭要素 2 - 接頭要素 1 - 基本形
 -1 +1 +1

- (6) nupekorapapse=an kor
涙を流す=4.S ながら
 「私は涙を流しながら」

[国立アイヌ民族博物館 : C0151L00848]

- (6)' nupe - ko - rapapse
 涙 ～に対して 落ちる
 接頭要素 2 - 接頭要素 1 - 基本形
 -1 +1 +1

⁶ なお、o-については「これは伝承文学や歌の中では頻々とあらわれるが、会話語ではあまり用いられず、少数の化石化した形式に於いてのみあらわれる。ここでは一緒に扱わない」としている(福田 1956 : 55)。

(7) kotan kor kamuy kor turesi e=koeikka
 村 ~を持つ カムイ ~を持つ 妹 2.SG.A=~から~を盗む
 「村を司るカムイの妹を(村を司るカムイから)お前は盗んだ。」

[久保寺 1977 : 265]

(7)' ko - e - ikka
 ~に対して ~について 盗む
 接頭要素 2 - 接頭要素 1 - 基本形
 +1 +1 +1

(8) e kuni p ne ciki hokao kuni p ne ciki sama
 食べる べき もの COP も 燃やす べき もの COP も 側
 a=okuta
 4.A=~に~をあける

「食べれるような物も、燃やすようなものも、そばに全部あけて(山積みに)して」

[国立アイヌ民族博物館 : N007PL00268]

(8)' o - kuta
 ~に ~をあける
 接頭要素 1 - 基本形
 +1 +2

(9) a=kor cihoki utar makan ramu hike hunta kotpa
 4.A=~が持つ 毛皮 複数 どのように 思う 方 札 ~に~をつける
 wa a=soyokuta.
 して 4.A=~を外に出す

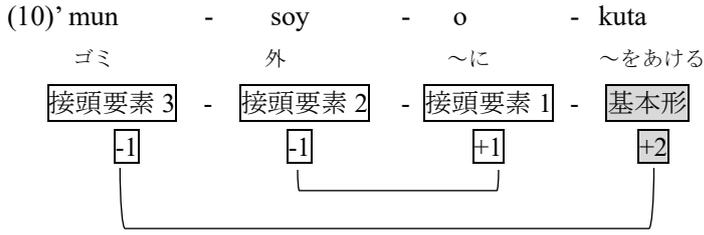
「私の毛皮のあるものには札を付け、私は外に出した」

[国立アイヌ民族博物館 N010PL00607]

(9)' soy - o - kuta
 外 ~に ~をあける
 接頭要素 2 - 接頭要素 1 - 基本形
 -1 +1 +2

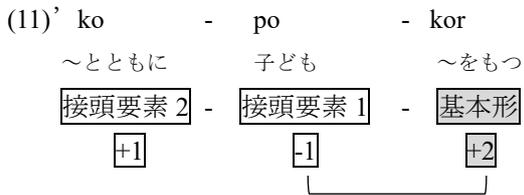
(10) munsoyokuta=an wa
ゴミを外に出す=4.S ~して
 「ゴミを外に出して、」

[田村 1985 : 38]



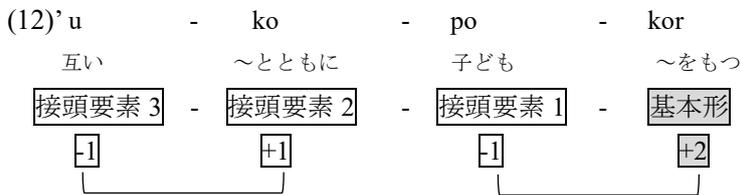
(11) a=macihi a=kopokor ka ki wa
 4.POSS=～の妻 4.A=～との間に子どもを持つ も する して
 「妻との間に私は子どもをもうけもして」

[国立アイヌ民族博物館 C0172L00389]



(12) tane (po...) ukopokor=an wa
 もう (言いさし) 二人の間に子どもがうまれる=4.S して
 「もう私たちの間に子どももうまれて」

[国立アイヌ民族博物館 C0170L00401]



以上、1 項動詞および 2 項動詞に充当接頭辞が接頭する際のパターンを 9 つほど示した⁷。先行研究での指摘と重なる部分もあるが、これらの実例に即して ta との差異を意識しながら整理すると、次の①～⑦までの事象が各例から確認される。

- ① 充当接頭辞は動詞の語頭に立つことがある。 (4)(7)(8)(11)
- ② 充当接頭辞を埋める名詞相当要素がともに抱合あるいは接頭される (5)(9)(10)(12) ことがある。
- ③ 基本形の項を抱合した後で、充当接頭辞がさらに接頭することがある。(11)(12)
- ④ 基本形の項を抱合した後で、さらに充当接頭辞及びそれを埋める名詞 (12) 相当要素が接頭することがある。

⁷ このほか別のパターンの可能性を含むものとして、例えば temsireciw 「あたりに腕をつく」(久保寺 1977: 423)という形がある。tem(腕)-sir(あたり)-e(～で)-ciw(～を刺す)という構成になっており、ciw(～を刺す)が sir(あたり)を、e-が tem(腕)をとっていれば、9 パターンとは別のパターンであるが、それぞれの結びつきが逆であれば、(10)と同じになる。どちらかはっきりしないため、ここでは可能性に言及するに留めておく。

- ⑤ 基本形の項を抱合せず、充当接頭辞及びそれを埋める名詞相当要素を (5)(9) 抱合することがある。
- ⑥ 基本形の項を抱合する前に充当接頭辞が接頭することがある。 (6)(10)
- ⑦ 充当接頭辞は一語のなかに複数あらわれることがある。 (7)

5. 抱合される名詞について

5.1. ta の場合

ta があらわれる動詞に抱合される名詞は、付加詞を取り込む構造の場合は、前述(1) mak(奥)-ta-anu(～を置く)の mak「奥」のように位置名詞である。位置名詞が抱合される場合は 2. で述べたように分析的な形、つまり位置名詞と場所格助詞 ta を動詞の外に置いた形 ((2)参照) と要素の並び順は変わらず、一見すると、そのまま動詞内にとりこんだようにみえる。格助詞の ta との関連性が強く推測されるのもそのためである。

一方、主語を取り込む構造の場合は、(3) poppe(汗)-ta-asin(出る)「～が汗をかく」の poppe「汗」のように、その名詞は「名詞-ta」が 1 項動詞に取り込まれる構造全体の「主語から生じる分泌物あるいはそれに近いもの」である。この点について詳しくは 6 で見ていくこととする。

5.2. 充当接頭辞の場合

充当接頭辞と同一の動詞に抱合される名詞は、例えば前述(9)soy(外)-o(～に)-kuta(～をあける)の soy「外」のような位置名詞、(6)nupe(涙)-ko(～に)-rapapse(落ちる)の nupe「涙」のような「主語から生じる分泌物あるいはそれに近いもの」といった ta と同様の性質をもった名詞のほか、それ以外の普通名詞も(5)uymam(交易)-e(～に)-arpa(行く)のように観察され、ta と比較すると自由である傾向がみられる。

6. 主語を取り込む構造について

ta について、主語を取り込む構造の場合は、その名詞は「名詞-ta」が 1 項動詞に取り込まれる構造全体の「主語から生じる分泌物あるいはそれに近いもの」であることを述べたが、充当接頭辞についても同様の構造と傾向がみられる。

名詞の動詞への抱合については田村(1973)、佐藤(1992)(1997)(2012)、柴谷(1992)など複数の先行研究があり、小林(2008)でも取り上げた。本節ではこれまで考察が十分になされていなかった形、1 項動詞に充当接頭辞等の項を一つ増やす接頭要素が接頭したうえで主語に相当する名詞が抱合された形に着目する(図 1 参照)。

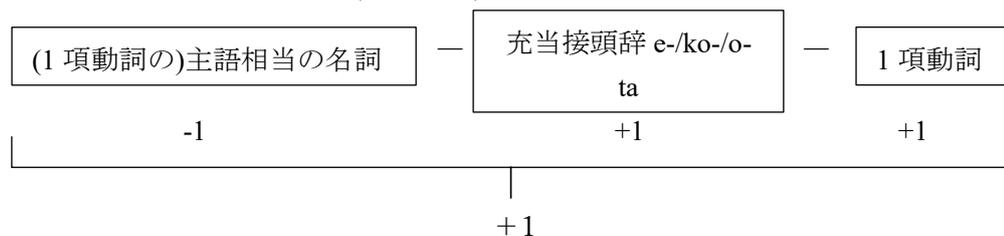


図 1. 1 項動詞に +1 の接頭要素が接頭し主語相当の名詞が抱合された形

佐藤(2012)は田村(1973)をふまえたうえで、抱合を披抱合名詞の機能から大きく以下の 4 つの型に分けている。佐藤(2012)で挙げられている例のなかから一例とともに示す。

I 「主語(自然力)+自動詞」型

例：sir-pekter 「景色が・明るくなる(=夜が明ける)」

II 「所有者要求的名詞主語+自動詞」型

例：teke-pase 「手(所属形)(teke)が重い(pase)=年を取って手が不自由になる」

III 「目的語+他動詞」型

例：ni-tuye 「木(ni)を切る(tuye)」

IV 「主語(自然力)+他動詞」型

例：koy-yanke 「波(koy)が上げる(yanke)=～が波によって岸に上がる」

佐藤(2012)は上記の型の出現率には偏りがあり、抱合の例として見られるものの多くは III 「目的語+他動詞」型であり、それ以外は例が少ないことを指摘している。そのうえで「自動詞主語は通常は抱合されないが、主語が漠然とした周囲状況を意味する自然力である場合か、身体部位を意味する名詞の場合に限って抱合されることがわかる。(引用者中略)主語は発話における一般的重要性から考えて通常は背景化されにくい要素と考えられるが、主語であっても事象全体からみれば背景的な位置付けしか持たない場合は抱合されるのである。これが通常は不可能と考えられる主語抱合のうち、自然力と身体部位が例外的に許される理由であろう」(佐藤 2012 : 20-21)と述べている。

また、佐藤(2012 : 8)は抱合で起こる「昇格(promotion)」についても言及しており、「アイヌ語の抱合における昇格には、他動詞主語の抱合に伴う目的語の主語への昇格と、所有者の主語への昇格とがあるとしている。具体例としては、他動詞主語の抱合に伴う目的語の主語への昇格については、「主語(自然力)+他動詞」型の koy-yanke 「波(koy)が上げる(yanke)=～が波によって岸に上がる」に主格の人称接辞がついた形、ku-koy-yanke 「私を(ku-)波(koy)が上げる(yanke)」において、句の場合に目的格の人称接辞 en-であらわされる「私を」が、主格の人称接辞 ku-に昇格している例をあげている。所有者の主語への昇格については、「所有者要求的名詞主語+自動詞」型の teke-pase 「手(所属形)(teke)が重い(pase)」に主格の人称接辞がついた形、teke-pase-an 「私たちが(-an)手(所属形)(teke)が重い(pase)」において、句の場合に所有者の人称接辞 a-であらわされる「私の」が、主格の人称接辞-an に昇格している例をあげている。この場合、主語は teke のような所属形であることも留意しておきたい⁸。

また、小林(2008)では、名詞が抱合される際の動詞の性質について言及した。先に例に出てきた teke(～の手)-pase(重い)「年を取って手が不自由になる」のように 1 項動詞に名詞が直接抱合される場合であっても、本稿で扱う nupekorapapse のように動詞に充当接頭辞が接頭した上で名詞が抱合される場合であっても、その基本形の 1 項動詞は対象を主語とする非対格自動詞であることを述べた⁹。

⁸ 手の所属形 teke(he)に対して、概念形は tek である。

⁹ 先行研究の中川(2001)は名詞+自動詞型に表れる動詞は非対格自動詞であることを示唆している。また、佐藤(2008:225)は「アイヌ語の場合、抱合される名詞にとって最も重要な条件の一つは、「動作主性がない

本稿で扱う主語を取り込む構造について詳しくみていく。「名詞概念形-ta」が1項動詞に取り込まれる構造(図2)においては、1項動詞はいずれも対象の意味役割のものを主語とする非対格動詞であり、抱合される名詞は対象の意味役割のものである(前述の表1参照)¹⁰。つまり、この構造においては抱合される名詞と基本形の1項動詞は主語と述語という関係にある。そして、taは+1の要素であり、動詞全体としては、もう一つ名詞をとることができる。具体例に即していえば、poppetaasin「汗が出る」という語の基本形asin「出る」は、この構造において対象の意味役割のものを主語とする。この語ではpoppe「汗」がそれに相当する。そして、もう一つの名詞的要素は意味役割としては「～に」という場所として考えられるが、poppetaasinは1項動詞なので、それは主格の人称接辞で表される((3)参照)。昇格が起こっているといえる。

	人称接辞	=	名詞概念形	-	ta	-	1項動詞
意味役割	場所		対象				
格	主格						
文法機能	付加詞		主語				
(例)	ku	=	poppe	-	ta	-	asin
	-1		-1		+1		+1
	1人称		汗				出る

図2. 「主語-ta-1項動詞」の構造

次に充当接頭辞の例をみていく。この構造について、佐藤(1997)はsir(あたり)-peker(明るい)「夜が明ける」と関連するsirkopeker「夜を明かす」という語を取り上げ、「ku-sir-ko-peker「私が夜を明かす」という構造について、昇格について触れたうえで、ko-のあらわれる位置について、おそらくは、sir-pekerが派生や屈折に関して閉じた動詞であるということが原因だと考えられる」と述べている。(6)nupekorapapse「涙が落ちる」の基本形の1項動詞rapapse「落ちる」は対象の意味役割のものを主語とする非対格動詞であり、抱合される名詞は、対象の意味役割のnupe「涙」である¹¹。つまり、この構造(図3)においては抱合される名詞と基本形の1項動詞は、主語と述語という関係にある。以下に示す(13)とこれまでみてきた(6)を比較すると、そのことがわかりやすい。動詞全体としては、もう1つ名詞をとることができる。もう1つの名詞的要素の意味役割はあまりはっきりしないが、(3)と平行的に捉える

か、極めて低い」ということのようなこととしており、非対格自動詞であるということはこの指摘とも適合すると考えられる。

¹⁰ 「主語-ta-1項動詞」の語頭にe-「～の上端」やo-が「～の末端」が接頭する例も複数確認される(表1参照)。この場合、e-やo-が接頭しても動詞の項数は変わらず、図2同様に、taの直前に置かれる名詞が主語であり、主格であられるものが場所的な意味をもつと考えられる。e-やo-によって主格の一部が指定される。例えば、o(～の末端)-sum(油脂)-ta-cik(滴る)であれば、主格の末端から油脂が滴るという意味になる。

¹¹ 充当接頭辞の場合は(6)nupekorapapseのほか、確認されるのはsir(あたり)-ko(～に対して)-peker(明るい)「夜明かしする」などごくわずかである。sirkopekerの場合は、佐藤(2012)でいう自然力が主語として抱合されている。

なら場所の可能性はある。nupekorapapse は 1 項動詞なので、それは主格の人称接辞で表される((6)参照)。ここでも昇格が起こっているといえる。

- (13) ku=nupehe ka rapapse rapapse kane
 1.POSS=～の涙 も 落ちる 落ちる している
 「私の涙もポロポロこぼれている。」

[田村 1996 : 443]

	名詞概念形	—	充当接頭辞	—	1 項動詞	=	人称接辞
意味役割	対象						場所?
格							主格
文法機能	主語						付加詞
(例)	nupe	-	ko	-	rapapse	=	an
	-1		+1		+1		-1
	涙		～に対して		落ちる		4 人称

図 3. 「主語-充当接頭辞-1 項動詞」の構造

図 2 および図 3 で示す構造は、1 項動詞から派生したものであるという点でいえば、佐藤(2012)でいう「所有者要求的名詞主語+自動詞」型に近く、名詞が抱合される前の結合価が +2 であるという点では「主語(自然力)+他動詞」型に近い。「所有者要求的名詞主語+自動詞」型と「主語(自然力)+他動詞」型は、どちらも佐藤(2012)で指摘のあった昇格が生じる型である。本節でみてきた「主語-ta-1 項動詞」の構造と「主語-充当接頭辞-1 項動詞」の構造についても、どちらも昇格が起こっていることは注目に値する。そして、「所有者要求的名詞主語+自動詞」型においては、主語は所属先を必要とする所属形名詞であるが、「主語-ta-1 項動詞」の構造と「主語-充当接頭辞-1 項動詞」においては概念形であることが用例からは推測されること指摘しておく。また、4.2 で「基本形の項を抱合する前に充当接頭辞が接頭することがある」(⑥)と述べたが、この構造においては、これは佐藤(1997)の「sir-peker が派生や屈折に関して閉じた動詞であるということが原因だと考えられる」という指摘と関連していることが推測される。つまり、0 項動詞の外側には +1 の要素が来ることはなく、この点では ta も充当接頭辞も共通している。

7. まとめ

ta と充当接頭辞は接合の順序に違いがみられる。ta は語頭に置かれることがなく、直前には必ず名詞が置かれるのに対し、充当接頭辞は、語頭に置かれることがあり、また連続して接頭する例が確認されるなど、比較的的自由である。ただし、0 項動詞には接頭しないことが先行研究ですでに示唆されている。

また、ともに抱合される名詞については、ta は位置名詞や分泌物あるいはそれに近いものに限定されているのに対して、充当接頭辞はそうした制限がない。

1 項動詞に接合した際に、ta と充当接頭辞のどちらにも主語を取り込む構造があり、昇格という現象が起きている。また、このとき基本形は非対格自動詞である。

以上、アイヌ語動詞にあらわれる ta と充当接頭辞について観察した。ta は位置名詞とともにあらわれる場合は、場所格助詞との関連性が推測されるが、確認される例はわずかであり、例外的な現象であるといえる。なぜこのような例外的な現象が起ころのか、同様の現象が別の格助詞にも起こり得るかなどの分析については今後の課題である。

略語

1, 2, 4 : 人称, = : 人称接辞境界, S : 自動詞主語, A : 他動詞主語, POSS : 所有, SG : 単数, COP : コピュラ

参考文献・ウェブサイト

- 萱野茂 (2002) 『萱野茂のアイヌ語辞典 (増補版)』 東京：三省堂.
- 金田一京助 (1931) 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究 二』 東京：東洋文庫.
- 久保寺逸彦 (1977) 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』 東京：岩波書店.
- 国立アイヌ民族博物館 「国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ」
<https://ainugo.nam.go.jp/> [2023 年 12 月アクセス]
- 小林美紀 (2008) 「アイヌ語の名詞抱合」『千葉大学 人文社会科学研究』 17 : 199-214.
- (2016) 「アイヌ語の名詞抱合における-ta について」『千葉大学大学院人文社会科学 研究科研究プロジェクト報告書』 298 : 5-12.
- 佐藤知己 (1992) 「抱合」からみた北方の諸言語」宮岡伯人(編)『北の言語：類型と歴史』 191-201. 東京：三省堂.
- (1997) 「アイヌ語の特徴と現状」『北方民族博物館友の会季刊誌 Arctic Circle』 22 (<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/a02/bunka/sato.html> 参照) [2024 年 1 月アクセス]
- (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京：大学書林.
- (2012) 「アイヌ語千歳方言における抱合の種類とその諸制約」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 18 : 1-32.
- 柴谷方良 (1992) 「アイヌ語の抱合と語形成理論」宮岡伯人(編)『北の言語：類型と歴史』 203-222. 東京：三省堂.
- 田村すず子 (1973) 「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」『アジア・アフリカ文法研究』 2. (ゆまに書房編集部編『アイヌ語考』 4, ゆまに書房, 99-120, 2001 年所収)
- 編 (1984) 『アイヌ語音声資料』 1. 東京：早稲田語学教育研究所.
- 編 (1985) 『アイヌ語音声資料』 2. 東京：早稲田語学教育研究所.
- (1988) 「アイヌ語」 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編『言語学大辞典』 1, 東京：三省堂.
- 編 (1989) 『アイヌ語音声資料』 6. 東京：早稲田語学教育研究所.
- (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京：草風館.
- 知里真志保 (1975) 『知里真志保著作集別巻Ⅱ 分類アイヌ語辞典人間編』 東京：平凡社.
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』 東京：草風館.

- (2001) 「自動性・他動性とアイヌ語の動詞」『ユーラシア諸言語の動詞論』1：1-18.
服部四郎編 (1964) 『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店。
福田すゞ子 (1956) 「アイヌ語の動詞の構造」『言語研究』30：46-64.

ta and Applicative Prefixes that Appear in Ainu Verbs

Miki KOBAYASHI
(National Ainu Museum)

Keywords: Ainu language, morphology, applicative prefixes, locative particles, promotion

Ainu verbs have a basic form joined to a prefix or suffix. These linking elements can be divided into three types in terms of their relationship to valence: those that increase the valence of the verb by one, those that decrease the valence of the verb by one, and those that do not increase or decrease the valence of the verb. In this paper, I focused on prefix elements that increase the valence of a verb by one. A well-known prefix element that increases the valence of a verb by one is a prefix that has traditionally been called an “applicative prefix.” Kobayashi (2016) pointed out that *ta* is another example that functions similarly, and stated that *ta* is presumed to be related to locative particles. In this paper, we compared applicative prefixes and *ta*. Although they share the function of increasing the valence of a verb by one, applicative prefixes have a relatively free order of conjugation, whereas *ta* does not appear at the beginning of words. There are also differences in the types of nouns that are conjugated. When prefixed with an applicative prefix, a variety of nouns appear, but when prefixed with *ta*, it is limited to positional nouns, secretions, and similar things, and so on. In addition, both have a structure that incorporates a subject, and in this case a phenomenon called promotion occurs.

(こばやし・みき kobayasmiki@gmail.com)